

【短報】

サラエヴォ事件のモニュメント

大平 晃久 (人文社会科学域 (教育学系) 教員)

ラテン橋から

ボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエヴォは、ボスニア内戦終結から約 25 年を経て、観光の発展が著しい。2009 年にはすでに、ロンリープラネットの 'best cities, regions to visit in 2010' の top cities 10 都市の一つに、京都やシンガポールなどととも選ばれている。多様な宗教と文化、またダークツーリズム的な内戦の痕跡など、旅行者を惹きつける資源に溢れた都市である。

サラエヴォの旧市街バシチャルシアにあるラテン橋のたもとは、第 1 次世界大戦の引き金となった、サラエヴォ事件の現場である (図 1)。ボスニアは 15 世紀以来のオスマン帝国の支配を経て、ハプスブルク帝国に 1878 年に占領、1908 年に併合されていた。1914 年 6 月 28 日、サラエヴォを訪問していたハプスブルク帝国の帝位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻が、ガヴリロ・プリンツィプによって暗殺される。プリンツィプはボスニア西部出身のセルビア人で、ハプスブルク帝国からのボスニアの解放と南スラヴの統一を主張する「青年ボスニア」のメンバーであった。事件の背後にセルビア王国がいるとみたハプスブルク帝国がセルビアへ宣戦布告し、4 年以上にも及ぶ戦争へと発展していった。

このように世界史的な場となったラテン橋は、第 1 次世界大戦のさなかから現在まで、さまざまなモニュメントが建てられ、また取り除かれる、記憶の対立の場となってきた。まず、ハプスブルク政府当局によって、戦時中の 1916 年には大公夫妻の慰霊プレートが暗殺現場横の建物(のちの博物館)の壁に、1917 年の暗殺 2 周年には大きな慰霊碑がラテン橋の北東のたもとに設置された²⁾。暗殺時に大公夫妻が乗っていた自動車の形も道路上に表示されていた³⁾。しかし、ハプスブルク帝国の敗戦、ボスニアを含む「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」(1929 年、「ユーゴスラヴィア王国」に改称)の建国によって、これらのモニュメントは取り除かれてしまう。ユーゴスラヴィア王



図 1 サラエヴォ事件現場

ラテン橋上からみる。正面の建物(博物館)左の路上で事件は起こった。2019 年撮影。

国時代の 1930 年に同じ場所に設置された、民族解放として暗殺事件を讃える記念プレートは、侵攻してきたナチスドイツによって 1941 年に取り外されてしまった。そして、第 2 次世界大戦後のユーゴスラヴィアでは、プリンツィプら「青年ボスニア」の民族解放の英雄としての位置づけはさらに強まる。1945 年にプリンツィプを讃えた記念プレート、1953 年にプリンツィプの足型が現場に設けられるとともに、ラテン橋はプリンツィプ橋と改称され、事件現場横の建物には事件を記念する「ガヴリロ・プリンツィプと青年ボスニア博物館」が設けられた。

ユーゴスラヴィア分裂と内戦によって、ラテン橋

の事件現場へのまなざしは再び大きく変化する。ボスニャク人（ムスリム）、クロアチア人からは、プリンツィプらはセルビア民族主義者との評価を受けるようになった⁴⁾。内戦中に博物館は閉鎖、プレート・足型は撤去され、橋の名前もラテン橋に戻された。内戦終結後の2004年に記念プレート、2007年に博物館も復活したが、プレートに刻まれた文言は内戦前からは変化し（図2）、博物館の名称も「サラエヴォ1878-1918博物館」になっている。

2014年のサラエヴォ事件100周年に際しては、様々な行事が行われるとともに、現地の景観も変化した。以前から復元が一部で取りざたされていた⁵⁾、第1次世界大戦中に建てられた大公夫妻の慰霊碑が、小さなプラスチック製のプレートではあるが、現地に復活したのである（図3）。また、プリンツィプの足型は内戦中に撤去され、博物館の入口に展示されるだけになっていた。2019年には、この足型を路上に復活させる予定であることが報道されたものの⁶⁾、2020年4月の時点でまだ実現していない。このように、ラテン橋付近は、サラエヴォ事件をめぐる記憶の対立の場として、いまだ変化し続けている。

英雄礼拝堂とプリンツィプ銅像

ラテン橋とその周辺だけでも十分におもしろいが、サラエヴォには他にもサラエヴォ事件に関わる重要なモニュメントが2か所にある（図4）。両方とも、”Lonely Planet”や『地球の歩き方』には紹介されていないが、ダークツーリズム的には必見というべきところであろう。

1つは、プリンツィプら「青年ボスニア」のメンバーが葬られた、「聖ヴィトウスの日（ヴィドヴダン）の英雄礼拝堂」である（図5）。市街北部のセルビア正教徒墓



図2 サラエヴォ事件記念プレート

博物館の壁面。現在の文章は中立的な書き方だが、社会主義時代には「この場所からのガヴリロ・プリンツィプの発砲は、反専制の人民的抗議と我等諸人民の長年にわたる自由への希求を表現している」と刻まれていた。2019年撮影。



図3 大公夫妻慰霊碑の復元プレート
2019年撮影。

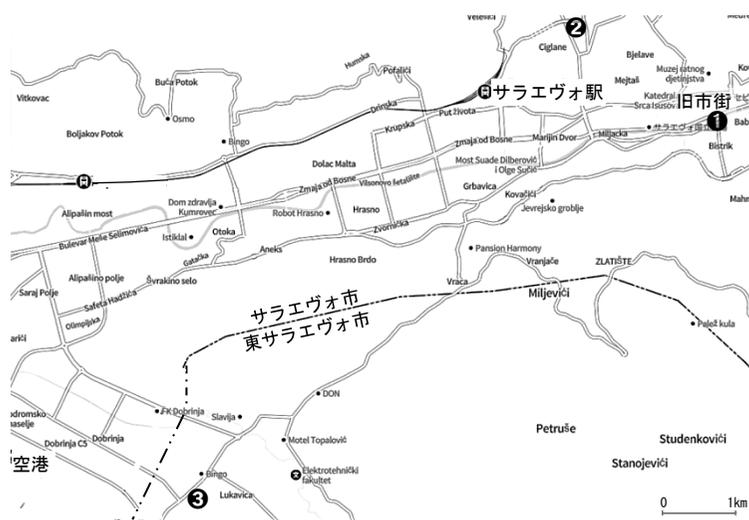


図4 サラエヴォ事件関連のモニュメントの位置

①ラテン橋 ②英雄礼拝堂 ③プリンツィプ銅像 Yahoo 地図をもとに作成。



図5 聖ヴィトゥスの日の英雄礼拝堂

礼拝堂前に墓碑もあるが、墓地の敷地に入ることにはできない。2019年撮影。

地の一角にあり、サラエヴォ冬季オリンピックのスタジアムや、内戦中に多くの死者が葬られたことで有名なサブグラウンド跡の墓地にも近い。1939年に完成したこの礼拝堂は、2019年に改修工事が行われている。なお、「聖ヴィトゥスの日」とは、サラエヴォ事件がユリウス暦6月15日に起こったことによる呼称で、セルビア人にとってこの日は1389年にコソヴォの戦いでセルビア王国がオスマントルコに大敗した日でもある。

この礼拝堂はサラエヴォの観光を網羅したサイト”Destination Sarajevo”には紹介されている⁷⁾。しかし、現地には何の説明もなく、墓地にも入れず外から眺めるだけである。

セルビア色が濃厚で、プリンツィプらを英雄視する礼拝堂は、現在のサラエヴォでは明確には宣伝しづらい。そのことを含めて、ここは記憶のせめぎ合う場といえる。

もう1つのモニュメントが、東サラエヴォのプリンツィプ銅像⁸⁾である。2014年6月、サラエヴォ事件100周年を記念して、「プリンツィプ公園」と命名された公園に建立された(図6・7)。

セルビア民族主義者とされるプリンツィプの銅像がサラエヴォに、と驚くかもしれないが、東サラエヴォ市はボスニア・ヘルツェゴヴィナ内のスルブスカ共和国(セルビア人共和国)に含まれる自治体である。内戦後、旧サラエヴォ市の大半はボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦(ボスニア・ヘルツェゴヴィナ内でボスニャク人とクロアチア人が主体となって構成した政体、以下では「連邦」と略す)に属することになった。しかし、旧サラエヴォ市の郊外(東部)の一部はスルブスカ共和国へと分離され、東サラエヴォ市になった⁹⁾。

プリンツィプ銅像は、東サラエヴォ市役所に近い住宅団地のなかにあり、新しい東サラエヴォにとっては地域シンボルである。新しく作られた東サラエヴォが、モニュメントによって実態化されており、その意味で新たな領域が作りだされているといえよう¹⁰⁾。またそれは、境界づけ bordering¹¹⁾でもある。プリンツィプの銅像と公園は、サラエヴォと東サラエヴォの境界、つまり連邦とスルブスカ共和国の境界を越えてすぐのところの位置し¹²⁾、みえない境界を可視化し、実態化しているからで



図6 プリンツィプ銅像
2019年撮影。



図7 プリンツィプ公園
右にプリンツィプのグラフィティ。2019年撮影。

ある。バス路線の分断、住所表示標の色・文字(緑・ラテン文字と、青・キリル文字)、宗教施設の種類など、旅行者でも注意深く歩けば、サラエヴォと東サラエヴォの領域・境界を実態化するものに気づく。プリンツィプ銅像もこれらと同様の機能を有している

13)。

また、境界ができなければ、このようなモニュメントがここに作られることはなかった。プリンツィブ銅像は、連邦とスルブスカ共和国の境界を越えられず、境界の外側のここに建立されたとみることが可能である¹⁴⁾。連邦・スルブスカ共和国間の人やモノの移動は自由で、境界の透過性¹⁵⁾は高い。しかし、全てが自由に通過できるわけではなく、モニュメント——あるいはより広く、コメモレイション（記念・顕彰行為）——はフィルタリングされてしまうのである。

近年、東サラエヴォ以外でも、景観のなかでのプリンツィブの顕彰が続いている。ボスニア西部オブリヤイ¹⁶⁾では生家が復元され、胸像も展示されるようになった（2014年）。また、スルブスカ共和国ビシュグラードのアンドリッチ・グラード（2014年オープンの一種のセルビア民族テーマパーク）にはプリンツィブを描く壁画が掲げられ、セルビア共和国の首都ベオグラードにも銅像が建てられた（2015年）。このように、サラエヴォ事件の記念・顕彰は、サラエヴォ中心部のラテン橋から範囲を広げていくと、違った様相を呈する。記念・顕彰が今後どう変化していくか注目されよう。

注

- 1) “Lonely Planet's best cities, regions to visit in 2010”, <https://www.independent.co.uk/incoming/lonely-planets-best-cities-regions-to-visit-in-2010-5504953.html>（2020年4月20日検索）。
- 2) Becherrelli, A. “Remembering Gavrilo Princip” in Biagini, A., Motta, G. eds. *The First World War: Analysis and Interpretation, vol. 1*, Cambridge Scholars Publishing, 2015, p.23. 以下、歴史的内容は特記のない限りこの論文の記述による。
- 3) “The First Sarajevo Plaque: The Photographic Evidence”, <http://serbianna.com/blogs/savich/archives/2795>（2020年1月31日検索）。
- 4) 柴宜弘『図説バルカンの歴史（増補四訂新装版）』河出書房新社，2019（初版2001），103頁。
- 5) 以下の記事によれば2001年のことである。“Gavrilo Princip or Franz Ferdinand? Heroes or Villains?”, <http://global-politics.eu/gavrilo-princip-franz-ferdinand-heroes-villains/>（2020年4月20日検索）。
- 6) “Steps of Gavrilo Princip again on the streets of Sarajevo”, <http://thesrpskatimes.com/steps-of-gavrilo-princip-again-on-the-streets-of-sarajevo/>（2020年4月20日検索）。2019年2月の記事。足跡復元だけでは価値中立的であり、プリンツィブ顕彰とはいえないであろう。
- 7) “The Chapel of the Vidovdan Heroes”, <https://sarajevo.travel/en/things-to-do/the-chapel-of-the-vidovdan-heroes/187>（2020年4月20日検索）。
- 8) Slijepcevic は2014年のサラエヴォ事件100周年の記念・顕彰を報告しているが、そのなかでこの東サラエヴォのプリンツィブ銅像を、ジェームス・ヤングを引用して‘counter-monument’と位置づけている。Slijepcevic, M., “Monuments and Counter-Monument Sights in Post-Conflict Bosnia and Herzegovina: A Case Study of Gavrilo Princip’s Monuments”, *Sociology Mind* 6, 2016, pp.114-129. しかし、ヤングは対立する一方を「カウンター」と称しているのではなく、従来型のモニュメントのあり方を拒否するようなモニュメントを‘counter-monument’と位置づけて論じているのであって（Young, J., “The Counter-Monument: Memory against Itself in Germany Today”, *Critical Inquiry* 18, 1992, pp.267-296 など）、Slijepcevic の議論は明らかにおかしい（なお *Sociology Mind* 誌はいわゆるハゲタカジャーナル）。むしろ、ヤングに依拠せずに‘counter-monument’とよぶことは可能である。
- 9) 東サラエヴォ Istočno Sarajevo 市は人口約6万人。旧サラエヴォ市に属した部分（基礎自治体）だけでなく、周囲の基礎自治体と連合して設置され、市域は（旧・現）サラエヴォ市よりもはるかに広い。なお、プリンツィブ公園・銅像は、旧サラエヴォ市域の東サラエヴォ市東ノヴィサラエヴォ基礎自治体に所在する。
- 10) サックの「領域性」については、山崎孝史『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて（改訂版）』ナカニシヤ出版，2013（初版2010）など。
- 11) ディーナー，A.C.・ヘーガン，J.（川久保文紀訳）『境界から世界を見る：ボーダースタディーズ入門』岩波書店，2015（原著2012），81-82頁。
- 12) 多くの旅行者が利用する東サラエヴォバスターミナルから近い。
- 13) このほか、東サラエヴォでは、プリンツィブの顔と「1908」と記した（図7のグラフィティと同じ図案）ステッカーが各所に貼られていた。
- 14) 単に仕切られたというよりは、境界でフィルタリングされて濃くなっているというべきだろうか。
- 15) 前掲11) 90-92頁。
- 16) 連邦に属し、クロアチア人が多い地域であるが、少数派のセルビア人も残留している。